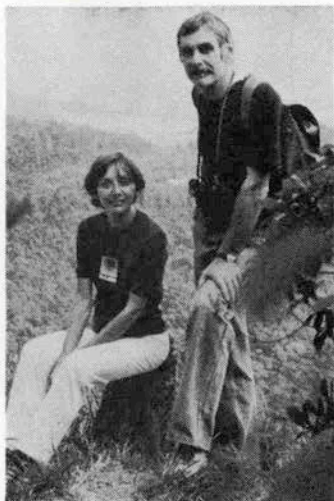


・六甲山100コース

# 山登りは美容に最適ね

ハンス・ハエンジニア & ケセニア・ブリゲツサー



甲山を望む地点で

（梅雨入り宣言も間近かな或る日、折からの新緑のなかをハンス & ケセニア・ブリゲツサー夫妻と六甲山を歩いた。ハンスさんはスイス人。神戸でエンジニアとして活躍されている。ケセニアさんはユーゴスラビア人で魅力あるレディ。実は山道を歩きながら日本語の堪能なケセニアさんから話を伺い、記事としてまとめるというのが編集子の魂胆だったが、中味をあげてみるとまったくそれどころじゃなかった。とにかく足が速く、歩くというよりも「飛んでいる」という形容がぴったりで、ついに行くのがやつという有様であったのだ。）

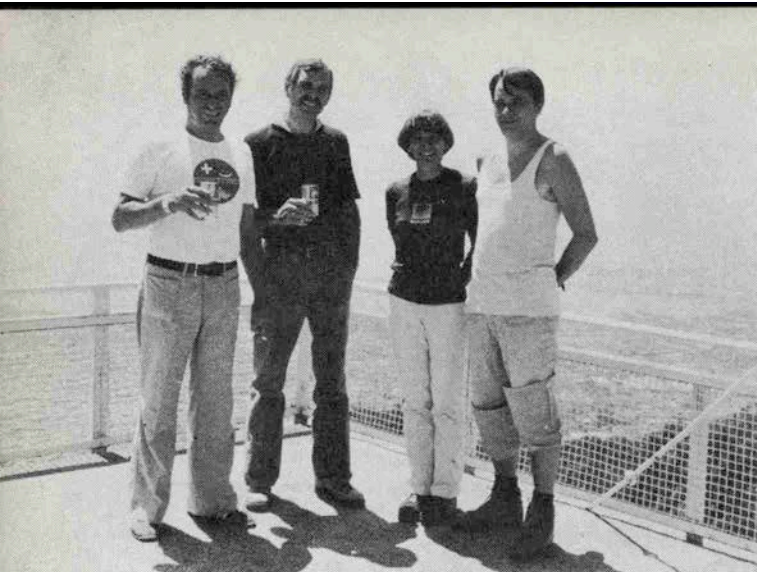
今回のコースのうち、布引から摩耶山頂までは私の一番好きなコースです。トレーニングコースとしても最適ですよ。道はきついですが、普通、一時間三十分で山頂まで行けます。休憩は途中で十分ほどが一回だけ。六甲山頂へ出るとクルマが多くて、もう、厭ですねえ。いつ

もなら布引を七時四十五分に出ると三時には宝塚に着いています。

私と主人は毎朝五時三十分から山を歩いています。布引の茶屋まで行くんです。そこで、ゆつくりと新聞を読んで、いろいろな人との会話を楽しむ。殆んど年寄りですね。若い人は滅多にいません。みんないろんな話をしています。健康についてやら花の肥料についてやら、面白い話を耳を傾けながら、紅茶とトーストで朝食をとります。私は砂糖一つ、ミルクなし。主人は砂糖もミルクもなし。言わなくともちゃんと用意してくれるんです。常連ですからね。家へ帰るのは大体六時四十五分です。

（実は今回の取材をお願いしたとき、朝は何時でも結構ですよ。五時でも六時でも、といわれてドキッとしたものだが―結局、八時に新神戸駅でとなった―なるほど、毎朝早朝登山をされているのだから朝早いのは苦にならないわけだ。そのかわり就寝も早く、取材の前日は九時に寝ましたということだった）

私も主人も日本へ来るまでは山登りの習慣はなかったんです。主人と結婚をした年に日本へ来て、神戸に住んで十七年になりますが、山へ登るきっかけは神戸へ来たからです。山がすぐ近くにあるでしょう。近くにあるのに登らないのはもったいないし、それと、山の上には何があるのだろう、という好奇心もあったことです。それで初めは布引の貯水池まで、それから摩耶山まで、そして六甲山までとだんだんと伸ばして行っただけです。



左よりガイザーさん、ブリゲッサー夫妻、プリスさん（奥摩耶山頂にて）ガイザーさんとプリスさんは共にスイス人で毎土曜日奥摩耶まで歩くそらだ。

山へ登るのは第一健康にいいですね。私も主人も山登りを始めてずっと元気になりましたよ。プロポーシヨンの維持のためには絶対にいいですね。筋肉も強くなる。（普通、中年の外国人女性というとピア樽姿を連想しがちだが、ケセニアさんは実にスマートで、無駄なぜい肉がまったくない。その秘訣が山登りにあるのだ。世の女性諸氏、たまには六甲山を歩こう。実際、二人の後から歩いていると二人ともに足が勝手に歩いているような軽やかな感じであつたに驚かされたのだ）

私は今の季節はジーンズとTシャツで行きます。えっマニキュアですか。ええ、マニキュアもしています。主人はいつも笑うんです。バカみたいだ、見る人もいないのにつて。でも、私はだらしなのは嫌いなので、山へ登るときもいつもキツチリとして行くのです。自分のためにキチンとするのです。もち論、主人のためにもね

（笑）。これも習慣ですよ。

（もう一つ驚くことがあった。お二人とも殆んど途中で食事をとらないのだ。布引―宝塚間三十五キロの長丁場で休憩をたつぷりととつたのは一軒茶屋だが、ケセニアさんはそこでサンドイッチを一片、また、ハンスさんはうどんを一杯とつただけ。あとは飲みもの、それも大抵はホットコーヒード、これは冷たいものを飲むと身体を冷やすから、ということだ）

私は毎朝布引の茶屋で紅茶を飲むだけで、帰ってから果物とオートミールで食事をします。主人は一軒茶屋でビールを飲みましたが、ここからは宝塚まで真直ぐな道だからです。ただ私はタバコを喫うんです。で、いつも主人におこられるんです。タバコを喫ったら山へ行きなさい。都会は空気が悪い。山へ行つて新鮮な空気を吸いなさいってね。私は元来少食なんです。黒パン、外米、それとオレンジ、グレープフルーツ、リンゴなどの果物をよく食べます。主人はサカナも食べますが、ステーキは余り食べません。夏場はラム、チキン、野菜、そしてスイスのチーズ。でも年とともに甘いのが好きになりました。主人もそう。私はケーキをつくるのが楽しみなんですよ。

（九月にはスイスへ戻り、三週間ほど滞在の予定。この機会にスイスの山へ登る計画がある。もち論、初めてである）

今回歩いたコース以外では、須磨―菊水山―鍋蓋山―再度山のコースもきついで面白いですね。充実感、満足感が得られます。六甲全山縦走はまだなんです、これは冬に行きたい。六甲山の四季では冬が一番好きです。空気がさわやかで、雪を見るのが大好きなんです。布引貯水池へも朝六時頃行きますと、北京ダックがいっぱいいます。二月頃、神戸ゴルフクラブのあたりは雪がたっぷりと積っていて静かで、冬だけ歩いているとあたたくて気持ちがいいのですよ。ちっちゃな山小屋に雪が積っている風景は私の大好きなものです。



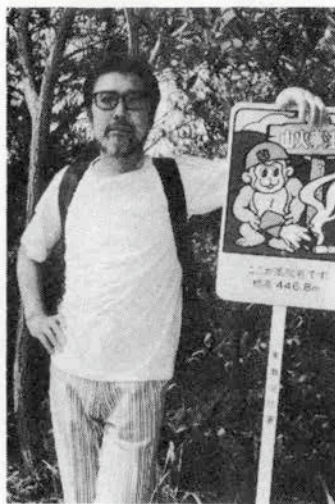
六甲山100コース

△その44▽

阪神芦屋―大谷茶屋―地獄谷―ロックガーデン―風吹岩―雨ヶ峠―東お多福山―登山口バス停

# 六甲男性美・女性美

塚本佳治／日本自然保護協会観察指導員・いこいの山岳会会員▽



風吹岩にて筆者

本日、梅雨入り宣言。明日の山行中止。ところが、一夜明けるとカラカラ天気。編集子より「ゴオー」のサイン。あたふたと阪神芦屋へ馳せ参じる。

大谷茶屋直行。ここにて衣裳を整える。目前に「金玉大明神」の石柱。「ナンの大明神」「ワシや知らん」。休日には足の踏み場もない茶屋だが、今日は名物関東煮も鍋だけで人気なし。高座滝の岩に取りつけられている、クライマーの先輩、藤木九三氏のレリーフに黙礼（このあたりシーズンには順番待ち）。ロック銀座中央稜を横目に、地獄谷へと下る。さあ高度を稼ごう。滝とまではゆかないような落差の小滝、ミニ滝をよじ登り、這い上り少しシャワーも浴びて、七つも越えたかな、愛称「小便の滝」へ到着。「ここでそうめん流しをしたら美味そう」との声が出る。ぼちぼち口より胃の方が黙っていない様子。オサエてオサエて。閒き流して歩く。これを右

に曲がり、一人通れるほどの廊下状に突き当たる。昼なお暗く頭上よりシダ蔽い被ぶさり「ちよっとした探険隊気分」とS氏。通り抜けた所、右手にウマイ水場あり。ここで丁度時間となりました。GIストープに火を点ける。味噌汁の湯気、バーベキューの焦げる匂い、アэндにぎり寿司。和洋折衷のランチだ。デザートは密柑の罐詰のシャーベット。顔の綻ろんだところで「ホナ行コカ」。

A懸岩（Aケン）を後に、右のBケン尾根へ這い登る。このあたり、雪山シーズンには、足にアイゼン、手にピッケル、肩にザイルとトレーニングの若者達で賑わう。私も毎冬アイゼンワークの御世話になる所でもある。

谷の様相は一変し、ロックガーデンの全貌が見える。北に万物相、墓場と風化侵食された、花崗岩の異様な景色。荒々しくそそり立つもの、大、小剣の如く林立しキョロキョロ前後左右の風景に目を奪われながら、痩せ尾根を行く。騙しのきかない足腰の移動も慎重に、通れそうもない岩と岩とのかすかな隙間を、ブルドーザの如く、強引に突進する女性軍。そのケツ圧で削り取られた痛々しい岩肌が目粒。

B懸岩（Bケン）前の広場を左へ廻り、万物相の裏から、ピラーロック尾根へは、砂走り状をズルズルと一登り、墓場の横へ飛び出す。乱杭菌のように乱立する岩峰。「誰かの顔に似ているわ」「色んな顔に見えるね」「観音様みたい」S氏「イースタ島の石像だ」。ワイワイガヤ



「今日登り終了」。元氣をつけながらやっと雨ヶ峠。ヤガヤ、風吹岩にて小休止。青屋浜の超高層住宅、西宮リットハーバーを後目に「サテお多福デツカ」と歩き出す。ゴルフ場の猪よけの柵も過ぎ、カントリークラブ好意の水道栓のある所で小休止。「日の陰るまで休みましょうか」。少しバテたかな。「これを登るとお多福が見える」。

ヤツ、頂上への道は木の階段がビツシリ。「何んでこんなとこ階段つけるんや」ボヤキ、そして少しオコリ出した女性軍。

雨量計のあたりか、「ヤ」「マア」モクモクと先行していた女達の嬌声。今迄の突兀とした荒々しい男性美と対称的に、青い天鵝絨を敷き詰めたような、女性的な山のうねり（六甲山唯一の秩父古生層の珪質頁岩の高原）。東に赤い屋根青い屋根の奥池。ヨーロッパムードに浸り、高原のロマンに大阪より遠来のMさん「六甲にもこんな所があるのね」。写真屋S氏はシャッターをパチパチ。だが南に目を転じると、草原の大半から荒地山へかけて、ゴルフ場に削り取られ、北は最高峰の悪名高きアンテナ、西お多福山の四本柱がのし掛つて来る。イヤダイヤダ。青青青一色をノンビリノンビリとピークを三つ四つ頂上へ。五十二年四月、この場所で山火事にある、折りからの西風に煽られ、煙に巻き込まれ、転がるように下山した時のことが、フット脳裏を過る。火の元御用心。ズンズン下ると生々しく焼けた傷跡、元の姿に戻るのは何時のことか。山に登り、山で遊び、山を愛する方々に、御願したい。一人一人の小さなマナーが、ゴミをなくし、山を荒らさない。

ススキが原状の所で、今を盛りのウツギの群落に見送られ、蛇谷から一路登山口バス停へと下る。

今日は平日のせいか、山屋と二人すれ違っただけで、コンチワ―野郎も、ゴクロウサン虫もない、静かな静かな、御機嫌な山行でした。





●神戸を福祉の町に△80▽

# 福祉のころ

坂井 時忠△兵庫県知事▽

橋本 明△家庭養護促進協会事務局長▽

司会／西条 遊児

増田 光吉△甲南大学教授▽

村木 高美△ボランティア▽

今月は、去る六月十五日サンテレビで放映された「五二〇万人の兵庫——ふくしのころ」の座談会から要点をまとめてみました。

★「物」から「心」の時代へ

司会 福祉も兵庫県が善意の日を制定した頃とだいぶ変わってきているのでしょうか。

知事 制度などは変わった点があるとしても、お互いが幸せになるため助け合っていくという気持ちに変わっていないと思います。昔と比べて物質的には豊かになりましたから、物質的な助け合いよりも心の通う家庭づくりや地域づくりの方が大事になってきたといえましょうか。

司会 物だけでなく、心が大事な時代へと変わってきたんですね。さて、増田先生は最近アメリカから帰国されて、日本とアメリカの福祉風土の違いのようなものを感じられましたか？

増田 アメリカではボランティア活動をするということが大変高く評価されてますね。裏返しにいいですと、何もしない人はバカにされる。社会のために何かをすることは高く評価されて、自分もそれで満足しているという面が日本とだいぶ違うように思いましたね。

橋本 私は民間の立場から里親運動をしていて、新聞やラジオで「親のない子を育てて下さいませんか？」と呼びかけるとかならず何人かの人たちが「私が引きとってあげましょう」と申し出て下さったり、資金に困っている

と見知らぬ人たちから寄付や励ましの手紙が届けられたりするのですが、こういう仕事をしていますと、今の世の中にはまだまだ人間の善意や思いやりの心というのが満ちあふれているような気がしますね。その思いやりが日常の生活の中で隣人へ向けられれば一年三六五日が善意の日になると思うのですが。

司会 日本人はそういう善意を外に出すのがヘタなように思いますがどうしてでしょうね。

増田 社会の中にそういう善意の気持ちを受け入れるしくみがうまくできていないということもありますね。気持ちをもっと気楽に、素直に出せるしくみがあっていいと思います。欧米には宗教的な伝統もありますが。

村木 私は大学一年の時からずっとボランティア活動が続けており、障害者の「希望の旅」にもボランティアとして参加させていただいていますが、みんな何かやりたいて思っている、気はずかしいとか、いいカッコしてると思われたりするから気軽にやりにくいんですね。何かちょっとしたキッカケがあればやれるんですが。

★「福祉のころ」はみんなのもの

司会 ところで、ボランティアというのはどういうものなんでしょうか。

増田 これは私の考えなのですが、四つほど特徴をもったものだと思うんです。

第一は原則として無償の奉仕。第二は身内のものに対してでなく、公のものに対する奉仕。第三は寄付などで



左から西条遊児、坂井知事、増田、橋本、村木のみなさん  
(写真/兵庫県広報課提供)

はなく、自分の身体を動かしてする活動であること。第四は継続的な活動であること。この四つを兼ねそなえたのがボランティアといっているのではないかと思います。橋本 私がアメリカでボランティア活動をしていた時に同じグループに二十歳ぐらいの脳性マヒの女性がいて、彼女は知恵遅れの子どもたちの施設へ学習指導にいらしたんです。それを見てショックを受けてましたね。私の頭の中には、脳性マヒの彼女は福祉のサービスを受ける側の人間であって、サービスを提供する側の人間ではないと思います。福社というのは与える側と受ける側とに分けるような形のものではないということを改めて思い知らされました。他人のしあわせのために何かをするというのが人間の喜びでもあり、福祉のこころ

なんです。

**知事** お年寄り是一般に保護を受ける立場にあるように言われます。しかし、兵庫県の老人会のみなさんに、子ども施設のお手伝いをお願いしたら大変喜んでやってくださるし、子どもたちも本当に喜んでくれています。お互いに励まし、助け合うなかに、いろんな生甲斐が生まれてくるんですね。

**村木** 障害者と接していても、仲良くなると彼女が障害をもっていて私が障害をもっていないというような意識はなくなつて、たまたま私の友達が障害をもっているから車イスを押して町へ出ていくとか、手話で話をするんだ、という気持ちになりますね。

**増田** 福祉というのは特別に自分たちの生活と分けて考えるようなものではないんですね。誰だって老人にはなるし、事故で障害をもつかもわからない。ですから福祉のこころというものを誰にも自覚してもらうことが大切ですね。

**橋本** 外国の福祉工場を訪れると、かなり重度の障害者でも、それぞれの障害に合わせて造られた機械を操作して仕事に取りこんでいる姿を見かけますが、それは人間を機械に合わせるのではなく、機械の方を人間に合わせるという考え方なんです。それは一人一人の人間のしあわせを個別的に考えていかなくてはできないことで、この考え方が福祉の思想を支えているようです。

**知事** 人間時代、まさに人間中心でなければなりません。経済についてさえそれが言えましょう。兵庫県のふるさとづくり運動も、私は人間中心の福祉の運動だと考えているんです。

**増田** これからのコミュニティづくりのなかで、みんなに共通した大事なものはやはり福祉でしょうからね。

**村木** 私も地道に肩を張らず、ゆっくりとボランティアとしての活動が続けていきたいと思っています。

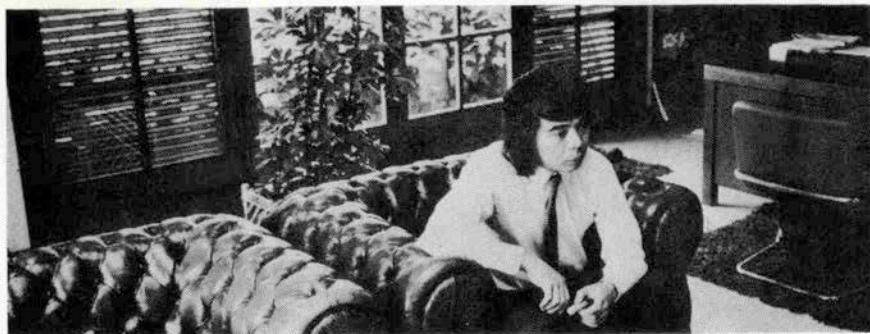
**司会** これからもお互いがんばってよりよい地域づくりをしていきましょう。



・神戸のファッションメーカー〈J A V A〉

# 今の桃は形だけ綺麗

## 細川数夫社長にきく



若々しい細川社長

白壁に緑の屋根の、メルヘンに出てくる家のようなJ A V A本社ビル。最上階の社長室は斜めの天井と大きな窓からの緑の街がとももファッションナブル。ジャバファッションを感じながら細川数夫社長にお話を聞いた。

— J A V Aは創立何年目になりますか。

細川 十七年目です。学校を卒業したのはちょうど就職難の時代で、入社できたのがオールスタイルだったんです。まだ生田神社傍の四畳半程の小さな事務所で、ファッションとの関り合いはそれからです。

— ニットからスタートですか？

細川 J A V Aは布帛からです。その頃はまだ単品志向で、ブラウスはブラウス屋、スカートはスカート屋と分かれているのが普通だった。紳士物ではトータルファッションメーカーでV A NとかJ U Nがあったのです。婦人物でもトータルファッションができないか

と——。新しい傾向でした。

— そして今やジャバ、子供服のベベなど六社が集まったジャバグループに成長。若い会社のエネルギーですね。

細川 我々は若い企業ですから大企業の人たちと対等であるには基礎ベースがしっかりしてなくてはならないと思うんです。例えば社員の出社時間にしても、始業は九時ですが十五分前にはみんな出て来ていますよ。

— 若いファッションメーカーを訪問すると、そこで働いている人たちはみんな生き生きとして——女性も多いですね。

細川 うちも女性が多いし、男性より優秀な人も多いですね。私自身もそうなので、結婚してからの共稼ぎも奨励しています。でも日本の社会では結婚して子供がいて仕事というのは、大変でしょう。

— 社員教育はどういう形でされているのですか。

細川 社内研修を、今年から始め

ましたが、技術や知識を教えるハウ・トゥじゃなくて、精神論みたいなが多いですね。

デザイナーでも最近では、以前より高度な知識や技術を学んできています。だけど「知識」であって知恵にはなっていない、頭の中に蓄えているだけで活用しないあるいは消化不良のままに受け売りで形で出してしまわんです。昔、つまり大正や明治の日本人に比べると今の若い人たちは「本物」を持っている人が少ないような気がするんです。もちろん、素晴らしい人もいますよ。そこで、根底は精神論、底はそこ（笑）と思うのです。

—与えられる物が多過ぎる時代になった、ということ



でしょうね。

細川 ハングリーな精神が少なくなってきたのですね。教えられる、与えられるというのじゃなくて自分自身で学ぶ気持ちや姿勢が大切なわけですから。何かを掴み取ってやろうという意欲ですよ。

—気力かしら。

細川 エネルギーね。それにリスクを持たない人もふえてきた。男と女の関係もそうじゃないですか？

—えっ？

細川 大恋愛が減った、愛情が淡泊になりましたよ（笑）。食物にしたって同じですが、例えば鶏とブロイラーの味

の違いですよ。果物や野菜

とか、外見は型が整っていて綺麗なんです、内面がないという味が無い。桃にしたってそうでしょう、昔の桃は型は不揃いだったけど、甘くて美味しかったですね。

—それではJ A V Aの、あるいは細川社長の、おいしいところはどこでしょう。

細川 自信を持って僕に云えるのは、ジャバの商品を一番よくわかっているのは僕



右は「ジャバ」上は「ベベ」の秋冬物だということです。製品の理解と知識。

それと、ファッションというのは、ある意味で「人気商売」なわけです。ですから「何か」がなくてはならないんです。特徴、個性が必要なんです。今は、私のJ A V Aという意味で、私の趣味とか、個性を出している。そしてどんどん出していいと思うんですよ。それが、外から来た人にはJ A V Aの個性は何と、分っていただけたと思います。

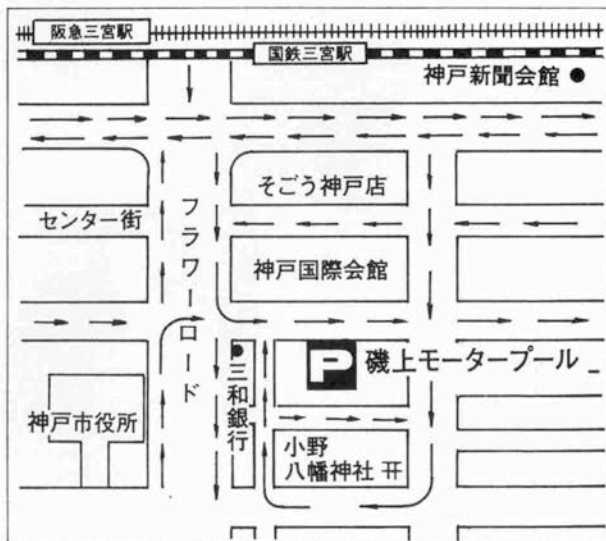




ビジネスに、ショッピングに

三宮で一番便利な

自走式立体モータープールです



- 収容台数 300台
  - 月極駐車可
  - 年中無休
- (8:00AM~11:00PM)



**磯上モータープール** (神戸国際会館前) TEL (078) 251-7873

# ●6月マンスリーサロン

## イメージとイマジネーション

講師／新井 満さん ＜神戸電通＞

「現代はIMAGEの時代——」であります。イメージ、心像、想像、観念、そして関係ないけどイメージ（イメージのフランス語読み）というタイトルのポルノっぽい小説がありました。そういう「イメージの現代」に、広告はどういう変遷をして、そしてどんな役割を担っているのか、アルファベットアベニューの住民の Man 氏ではなくて電通マンの新井満氏としてのお話でした。

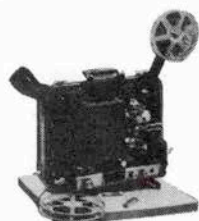
PRは、イメージ広告（ほら、何となく関係ない様なある様な、何の宣伝だろうって広告がありますよね）から、記事広告（広告なのか記事なのかかわからない広告）、そしてタイプライターのオリベッ

ティー社やサントリーや、パルコのような企業の存在自体が主張（何だか哲学みたい？）

というのが、最も新しい形。宣伝や広告だけでなく社会的文化的な価値のある存在の企業だというイメージづくりなわけです。ですから広告したからといって売り上げが伸びるはずもない製鉄会社のテレビ広告なんかもあるし、製作も凝っているんです。

PRということば、パブリック・リレーションの略だと考えると、広告主も消費者も棲み家は同じ「社会」という器。

そして、何故アメリカがコロンプスの発見に依るのにアメリカかを考えると（アメリカさんが見つけたそうです）“発見した！”と叫ぶこと、つまり公けに表現・発表することによってはじめて生まれる“存在”ということも。あながち金は沈黙ではないのかもしれないよ。



例によっての新井満氏を囲み記念撮影。16ミリ映写係は宮本さん。

### ★渡辺三船さん

＜レディスワタナベ＞

お待たせいたしました。三船さんちの玲奈ちゃんを初公開。みんな思わず「あっぱれそっくりや」と呼びました。将来美女の約束確か、ロペルタの洋服の似合う女の子になりますように……ってパパの期待も大なるところ。何年先のことが、気の早い、もはや甘いパパの三船さんであります。



パパそっくりのれなちゃん。わりとおてんばさん？元気のいい子です。

### ★市野木江充子さん

＜市野木ニッティングスタジオ＞

9月から、センタープラザ4階で始まる朝日カルチャーセンターで、プロのニットデザイナーを目指す人たちの講座を持ちます。「プランニング・トリコット——ニットデザインへのプロセス——」週一回予定。教えることにも意欲満々、その準備に大童の夏休み返上。

### ★中原武志さんの新住所

〒650-11 神戸市北区鈴蘭台西町5丁目6-5  
電話(078)593-7692

### ★横浜恵美子

兵庫のお店を閉めて息子さんと同居、楽しみで仕事は続けていくわと半隠居宣言。

新住所は西宮市今津水波町11-27 三宅俊夫様方

### ■8月マンスリーサロン

恒例六甲山Night

日時／8月23日（土）7:00～

場所／ガーデンレストラン「ホワイト・パフ  
ァー」078<891>0650 会費 ¥5000

講師／高橋 孟さん＜漫画家＞

ベストセラー「海軍めしたき物語」の高橋さんを講師に、涼しい場所の夜断で。

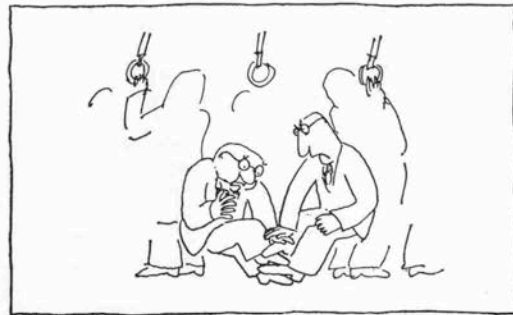
＜お知らせ＞

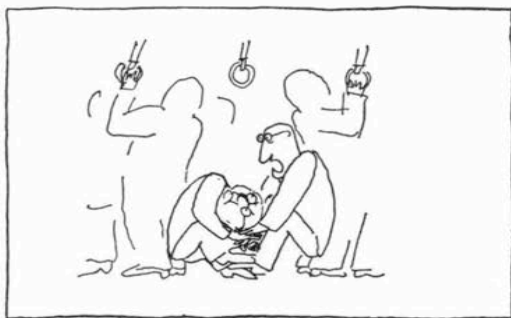
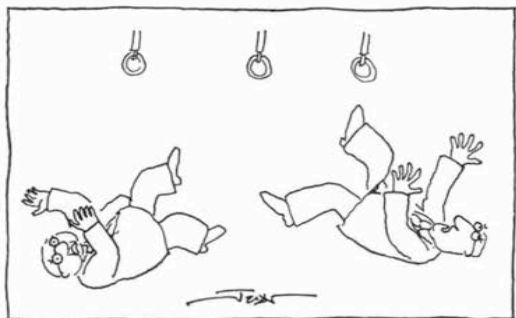
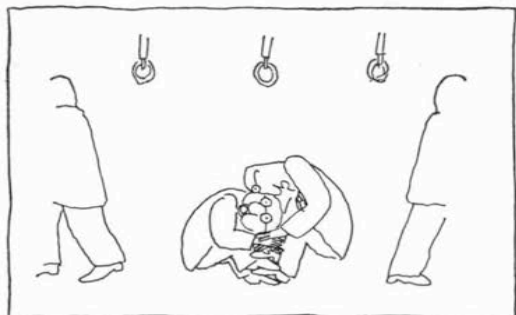
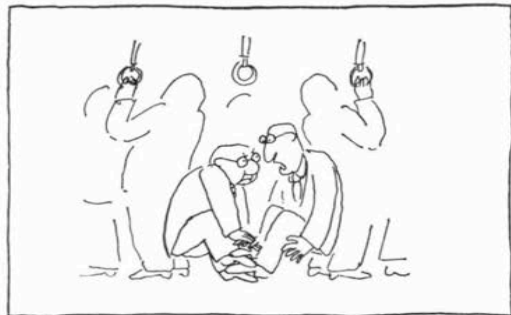
今期（55年度）よりKFS入会資格はファッション市民大学卒業生に限らないことに総会で決まりました。

お問い合わせ／KFS事務局まで。



# 愛すべき隣人たち 岡田 淳









&lt;32&gt;

# ジャズと オーケストラと ウサギ

淀川 長治

&lt;映画評論家&gt;



イタリア映画のオーケストラ・リハーサル  
主演のポールドウィン・バース

アメリカとイタリアとイギリス。映画はその、それぞれ  
の肌を見せる。

アメリカの「オール・ザット・ジャズ」はカンヌ映画  
祭で黒沢の「影武者」とグランプリをともに占められた。  
しかし出来は「影武者」とくらべると数段落ちる。

とは云ってもちかごろのアメリカ映画のなかでは、す  
ごく個性をひらめかした努力作。

舞台監督のイライラが映画のなかで幻覚的に描かれて  
ゆくのはフェリーニの「8½」のほうで感心しないが、  
舞台監督のイライラ、それもブロードウェイのミュージ  
カルの演出者（ロイ・シェイダー）のイライラを描いて  
いるそれがまさに、マンハッタンのブロードウェイの演  
劇人の体質を示して、どの外国の映画でもないニューヨ  
ーク製映画の面白さは持っている。ブロードウェイの三

十二の劇場は毎夜八時開演。その開演のベルと同時に場  
内のシャンデリアがゆるやかに消える。かくてカーテン  
が上る。このカーテンの上る瞬間が演出者にとっては胸  
に五寸釘。ダメか成功か。ダメならいかに前宣伝がゆき  
とどいていようが三日ともたぬ。ざんくに打ち切られ  
る。成功だと三年四年とロング・ラン。

この映画は「キャバレー」「レニー・ブルース」の映  
画監督ボブ・フオッシーというよりも「ダンシン…」「シ  
カゴ」「スイート・チャリテイ」「ピッピン」「キャバレ  
ー」のブロードウェイ・ミュージカルの舞台演出者であ  
り舞踊振付のボブ・フオッシーのその私生活にまでくい  
こんでゆく彼自身の伝記映画。まさにマンハッタンのブ  
ロードウェイ映画。

×

×

「オーケストラ・リハーサル」これはフェリーニの一  
九七九年作の一時十二分映画。カメラはいつものよ  
うにジュゼッペ・ロトゥンノ。ついでに加えると「オー  
ル・ザット・ジャズ」もこのカメラマンを使用してい  
た。さて「オーケストラ・リハーサル」とは六〇人ちか  
くの演奏者が指揮者の「ダ・カーポ」（はじめっから…）  
の声でオーケストラを始めてゆくそのさまを映画にした  
オーケストラ団員と指揮者の苦闘の映画、ラストは再び  
指揮者の「ダ・カーポ」の声で終る一時十二分の、こ  
れはフェデリコ・フェリーニのあいも変らぬすばらしい  
魔術の世界。といってもこの映画はフェリーニの美の幻

想がひろがってゆく映画ではない。舞台は十三世紀に建てられたらしいという古い寺。寺の中には法王や司教の墓が七つもあるようなカビくさい寺。ところがこの堂守がこの礼拝堂くらい音の反響のいいところは他にはないといふことが大自慢。そこでここでオーケストラのリハーサルがおこなわれるわけだ。さてオーケストラとその指揮者といえどタキシードやいかめしい黒い服の演奏者の集りを想像するのだが、この映画は古寺で日本というならば姫路の男、京都の女、東京の浅草のおやち、青森の青年といった各地でんでんばらばらの連中が集って指揮者が登場するまでは、今日はテレビがインタヴィューに来るんだと張り切る者、そのテレビはギラギラとしてインタヴィューするそいうだがケシカランと怒るもの、ピアノの下にかくれて女の演奏者と男の演奏者がセックスしてしまうすごさ。とにかくここに描かれるものは「人間たちのオーケストラ」なのだ。ボンジョルノ、ボノセラ、ボナタアーレ、ケベラコーザ、ベリッシモ、アモレ。フェリーニ映画はそのイタリア語の人間臭さから私たちがイタリアに誘いこむ。そしてこれは、ぐうぜんにも悲しくも昨年の四月十日に六十八才で亡くなったニーノ・ロータの映画音楽の遺作となった。ほとんどすべ



アメリカ映画のオール・ザット・ジャズ。主演のロイ・シェイダー。

てのフェリーニ映画の映画音楽を手がけたロータ。「オーケストラ・リハーサル」の最初にフェリーニは（ニーノ・ロータに捧ぐ）の悲しい文字を入れている。

イギリスのアニメ「ウォーターシップダウンのうさぎたち」（一九七九年作、一時間三十一分）。

アニメのうさぎの映画と聞けば（むかしむかし可愛いウサギがいました）というところだが、どっこいこれは勝手にちがった。

リチャード・アダムスが一九七二年に出版したこの童画の物語にマーチン・ローゼン監督（四十三才）が惚れこんで一九七五から四年がかりで完成したイギリス映画。初め頃からこわい。神がウサギの気まま勝手なふるまいに怒り、あらゆる他の動物を作りウサギを殺せと命令した。しかしそれではどうも可哀そうにも思えウサギが早く逃げられるようにあと足を大きくしシッポのピクピクがウサギ仲間との暗号となりあと足で地面をパタパタと叩くとそれは遠くのウサギにまでその合図がわかるようにしてやった。これが神話時代。

さて現代にいたってのウサギのこれは集団移動物語。安住の地を求めウォーターシップの丘へと移動してゆく。見ようによつてはこの童画の中に（人生）（生と死）を教えられる。



# 女体百景

◇96◇

## コケシ女

細川 董<sup>ただす</sup>  
△文とえ／哲学者▽

彼女は、ほんとにこけしそっくりの可愛い女の子だった。最初会った時から彼はひそかに恋してしまっていた。素朴で日本的で大正時代の女のように古風でさえあった。

もちろん、彼女は彼のあこがれの中では、パージンであった。小柄でボチャツと色白で、丸顔でどう見ても、こけしそっくりの顔立ちだ。

その頃、彼の行く放送局へアルバイトに来ていた彼女とは、ときどき、狭い録音室で一緒になるようなことがあっても、手の早いと定評のある彼にしても、さすがあまりに彼女がういういしくて可愛いくて肩を抱くことはおろか、手をふれることさえ彼には出来ないのだった。それは、さわりたくないというのではまったくなかった。話はまったく逆である。

本音はさわりたくて、抱きしめたくて仕方なかったのだ。

くちやくちやに、もみくちやにしたいのだが願望があまりに強烈すぎると、逆に、現実には反比例してまったく女に手も足も出さないというのが、男というものかもしれない。

これが男のロマンといえ、月並みすぎる。

それほどに彼女は古風で、ひかえ目すぎるほど古風なコケシ人形そっくりに、超ひかえ目だった。それは、人間という名のけだものの血など流れていようとは思えぬ神聖さにあふれていたのだ。

そんな彼女が、約一年ぶりにディスコ・パーティーの案

内状を持ってスタジオへ現われたのである。昨年放送局のアルバイトをやめて彼女は目下花嫁修業中なのだ。

「久しぶりに大阪へ出て来ましたの。部長さんにぜひディスコ・パーティーに来てくださるように、あなたからもいつてくださいね。私、神戸にボーイフレンドもいないし」

と彼女は、あいにく出張中の部長へのことづてを彼に托して帰って行ったのである。幸いなことに部長は

「君もぜひついて来給え」と命令してくれた。

彼は、部長のお供をして行ったパーティーだったのに、

部長はひとしきり彼女と踊るとさっさと帰ってしまった

「後は、君にたのむよ」

といい残して部長が消えてくれて初めて、彼はほんとうに生まれて初めて大好きなコケシ人形の手をにぎることが出来たのである。そればかりではない。その中にスローテンポの曲が始まると、彼女を抱きしめることさえ出来たのである。

短時間ではあったが、中年男の部長のなすがままにゆだねた彼女の踊り方が、部長が去った今も彼の脳裡に焼きついていた。

男の嫉妬の炎が彼をもやし始め、部長にさえあそこまで許すのならと思うと、彼は彼女を和歌山へ帰す気持ちには失せていた。踊りながら彼は尋ねた。

「もう十一時だけど」……………」



にバスへ入ることにした。

こけし人形の白くぼっちゃりした裸身をつめたいシャワーでひやし、バスでよく洗ってから一応ベツドまで両手に抱きかかえてやっと到達した時は、何ともかんとへたへたと彼はベツドへ倒れ込むところだった。

しかし彼女は、疲れを知らなかった。

「もう一度抱いて、」と彼女は求めたのだ。彼も八もう、あか

「オリエンタルホテルへでも泊って行く?」「……………」  
しばらく沈黙がつづいた後、「ええ」と彼女の返事がかえって来た。

「家へ電話しなくていいの?」

と、彼は念を押したが、彼女は「かまわない」というのである。勝ち誇った自信がにわかに彼に湧いて来た。ついにベツド・インした。彼女の燃え方は異常であった。

彼のアヌスをさえ彼女は指先で愛撫し始めたのである。あの虫も殺さぬこけし女が、である。おまけにくすぐったがる彼に

「あなた、A感覚それともV感覚?」

と質問してくる始末、V感覚と答えるひまもなく、彼女はつづけざまにトリプルヘッダーであった。長く懂れていたからこそ彼も彼女の苛こくな要求にこたえられたというものだ。

彼は、何とか彼女の燃えつづける火を消さねばと一緒

ん、Vとはいえなかった。風呂で中休みしたので逆効果だったかもしれない。

彼は疲れ、彼女はますます元気になったのだ。バスから出てまでも三回、都合一晚で六回、彼は彼女のお相手をしたのである。それでも、何とかお相手出来たのは良かったからだ。今の彼ならだめである。翌日、午後目をさましたとたん、彼のこわい母親の怒声が飛んで来た。

「あなた、ゆうべどこへ行ってたの?」

彼女の母親が外泊した娘から一部始終を聞き出し、婚約者のいる娘をよくも、もてあそんでくれたわね、と、電話があったというのだ。彼はぐうの音も出なかったが憧れの彼女に婚約者がいたなんて、初耳だったと、暗い気持ちになった。

今でも、大人のおもちゃの店の前を通るたびにショウ・ウィンドウの電動こけしをちよろっと横目で見て、彼はこけし女を想い出すのである。

● 地域文化のネットワーク

# 月刊 旅行アサヒ

有名書店で好評発売中!!

定価 780円 (送料160円)

年間購読料 9,360円

旅の味わい、旅のこころ、旅本来のあるべき姿…を求めて、  
全国のタウン誌が連帯してつくるユニークな旅の文化誌  
北海道「ふるさと十勝」 東北「タウンライフとわだ」「会津嶺」 東京「週刊きちじょうじ」「街角」 神奈川  
「江ノ電沿線新聞社」 静岡「豆州かわら版」 長野「松本情報」 奈良「マイ奈良」 石川「金沢おあしす」 兵  
庫「月刊神戸っ子」 高松「ナイスタウン」 高知「暮しの便利帖」 宮崎「宮崎春秋」 沖縄「青い海」



● 地域の新鮮な情報を満載 ●

8月号では——

- 特集/信州・松本そして安曇野
- 巻頭インタビュー/森 敦
- 対談「旅三昧」/陳舜臣 VS 梅原猛
- スケッチの旅・パリの陽だまりから/竹谷富士雄
- 日本の旅情・神話の里山陰「出雲路有情」/植田正治
- 大伽藍巡礼/比叡山延暦寺
- 表紙/早川良雄

9月号予告 8月15日発売予定

- 対談/團伊玖磨 VS 朝比奈隆 ● 表紙/鴨居玲
- 巻頭随想/井出孫六 ● 瀬戸内讃歌/緑川洋一
- スケッチの旅/佐藤忠良 ● 私の視点—中国・杭州/尾島俊雄

● お申し込み、お問合せは—— 〒650 神戸市生田区東町113の1 大神ビル7F 月刊 神戸っ子内旅行アサヒ係 ☎078-331-2246